

大分市元町石仏群の成立年代について

仲 嶺 真 信

〔1〕 序

豊後を代表する石仏として、第一に臼杵石仏群を挙げることに異存はないだろう。その優秀さと規模については、日本において他に追随する作例が見られない。この臼杵石仏群の成立を考える場合、比較的優れた石仏の多い豊後においては、大分市に存在する元町石仏（所在・元町）および岩屋寺石仏（所在・古国府）との関連を看過することはできない。創建当初より元町・岩屋寺の両遺跡は指呼の間で隣接する地域にあり、後述の記録から、かつては岩屋寺と総称されていたものと推測される。ともあれ、いわゆる元町石仏群の誕生に関しては、臼杵石仏群の成立と密接に関連していると考えられるので、きわめて興味をそそられる課題でもある。

さて拙稿は、現在の指定名称・元町石仏群に関する様式系譜を辿ると同時に、その成立年代について論及しようとするものである。まず結論を先に述べるならば、後述の理由から管見では、臼杵石仏群の草創時期（十一世後半～十二世紀前半頃）と重なるか、あるいはやや先んずる時期（十一世紀半ば～十一世後半頃）に開鑿を想定したい。つまり、一つは傍証資料を根拠にすると、『宇佐大鏡』所載の天喜元（1053）年の條に「南岩屋崎際」、あるいは同資料の康平二（1059）年の條に「南限岩屋寺前」^①などと記述されているので、おそらくその頃には岩屋寺石仏群（元町石仏を含む）の一部が成立していただろうと推測される。さらにもう一つは、仏像様式の上で、元町石仏本尊と奈良靈山寺薬師坐像（治暦二1066年）との相好が近似することが論拠になる。詳論は後程本論中において行うとして、その前に次においてしばらく、この一帯の地理的・歴史的概観を行っておこう。

〔2〕 地理的・歴史的概観

元町石仏群と岩屋寺石仏群は、それぞれ元町台地の東端部と南端部に位置する凝灰岩層からなる台地斜面の岩場が開鑿されており、この地域一帯は、大分川下流域左岸に発達した平坦地と散在する小高い丘陵に囲まれて展開している。歴史的にこの辺りは、奈良朝以来の国衙・国府などの中枢部が存在し、また古代から中世にかけて数多くの古跡にも恵まれている。ちなみに、飯沼賢司氏は、元町石仏群を含む岩屋寺は当時の国衙・在庁官人との関連から「国庁寺」としての役割を果たしていたのではないかと推測している^②。この元町に隣接する上野丘にはきわめて興味深い史実が残る。すなわち、上野丘に現存する金剛宝戒寺の旧地（羽屋～花園）は、

かつて古国府中床に国衙と並存していたという。さらに、かつて西大寺末寺であった金剛宝戒寺（現在・高野山真言宗）には、鎌倉末期の仏師康俊造立の胎蔵界大日如来像（文保二1318年銘、丈六。平成三年・国指定重文）、あるいは鎌倉期の珍しい清涼寺式釈迦像を安置することも判明する。また現・金剛宝戒寺一帯の西南に隣接する南太平寺地域には、文字通り旧太平寺址があり、その付近には伽藍石仏と称する仏像群が認められ、そこから西へ約1 km余りの間隔を置く近隣にも永興寺址が存在する。なお、大分川を少し溯った中流域の国分辺りは、文字通り豊後国分寺遺跡が残る要所でもある。ちなみに口碑によると、この元町石仏群の存在する地域は、大分郡賀来村大分国分字金ヶ崎の石仏と併せて国分寺の奥の院とも伝わり^③、その意味においては、とりわけ元町石仏は、国分寺とも関連の深い薬師像であろうという推測も成り立つ。仮に口碑の通りとすれば、国府と国分寺が境界を接する程の緊密な関連を保ち、いっそう元町石仏群の重要度が増すことが窺われる。さらに辺りをもう少し概観すると、大分川右岸にも珍しく洞窟形式の曲石仏群（伝・釈迦丈六坐像、天部二軀、阿弥陀三尊像）、また大分川支流の七瀬川中流右岸の高瀬にも高瀬石仏群（深沙大将、大威徳明王、胎蔵界大日、如意輪観音、馬頭観音）などが認められ、広域的に石仏の存在が確認される特色ある地域といえよう。よって、豊後が石仏の宝庫といわれる所以も自ずから理解されよう。また同時に、これらの地域は、豊後における一大仏教文化圏を形成していた事実も窺われる。

ところで、もともとは、現在の元町石仏本尊を示す岩薬師は、古国府村岩の下に存在した旧岩屋寺（かつて小野氏は、千仏龕下に存在した文政九（1826）年在銘の「猿田彦大神鎮座板碑」に岩屋寺名を確認された^④）の境内に相当し、また六坊村の円寿寺（現在上野丘・総社山円寿寺）の旧地であって、日羅により作られたという伝承がある^⑤。もっとも、現在の岩屋寺石仏群は、一時期、すなわち大正十二年三月建立の史蹟名称を記した標識には、「元町石仏」と明記されていたことが判明する^⑥。

ともあれ、中野幡能氏は、前掲の『宇佐大鏡』所載の天喜二年・康平二年の條に見える「勝津留島」に関連した「四至 東限市河（大分川） 西限高坂横道 南限岩屋寺前 北限市河（大分川）」に着目され、「勝津留島」は現在の上野丘台地と全く適合し、「岩屋寺」が現地点に合致することを指摘された。このことから、岩屋寺は平安後期（十一世紀中頃）の造立と推測された^⑥。なお、『宇佐大鏡』によると、元町石仏一帯に相当する「勝津留島」をめぐる以下の通りの事情が窺える。すなわち「勝津留島」は、永承元（1046）年に権介膳伴元恒（在地領主）が、国衙に荒野の開墾を申請し許可を得たものであり、後、多米倉満がその権利を請け伝え、天喜元（1053）年改めて、申請を許可する判を得て、永久に私領となさんことを請い国判が下された。ところが康平二（1059）年に至り、権掾伊賀為貞が妨害し横領を企てたので、国司に訴えたところ倉満に領掌すべき庁宣が下った。したがって、天喜年から十六年後の延久元（1069）に渡り倉満の経営が続けられたが、負債により承保元（1074）年蔵司近次に売却した。さらに近次は、承保四（1077）年に、津守常見に売却した。また常見は、承暦五（1081）年に、ついに宇佐宮毎年万燈会油料として宇佐宮に寄進した。これを機に宇佐宮御油御菌勝津留は国免庄として、宇佐八幡宮の権威

により不輸不入権が獲得され、永承後半世紀を経てようやく荘園として完成するに至る①・⑦・⑧。

以上、すこし立ち入って元町石仏一帯に関わる地理的・歴史的概観を行ってきたが、そのことを踏まえて改めて考えれば、古代から中世にかけての国府一帯はもちろんのこと、上野丘台地及び岩屋寺・元町石仏区域は、きわめて古くからの要衝としての存在意義を有していたことが窺われる。

〔3〕様式概観

現在のいわゆる元町石仏群は、臼杵石仏群と同様に凝灰岩層の岩壁に刻出されている(図1)。『豊後国志』によると、日羅作の薬師像と伝えられるが④、この日羅伝説は豊後の仏像に散見されるもので、厳密に考えれば、その伝説と元町石仏の様式年代とは整合しない。なお、『大分県史』も、薬師坐像(307cm)と呼称するが、現状の限りでは本尊は、両手を欠失し持物が不明である。したがって、尊名と作者(造立者)は特定し難い。しかし、薬師という尊名を強力に否定する根拠も見つからない。一方、工藤利三郎氏は、不動と並存することから本地である大日如来(胎藏界)を現したものと推測されている⑨。これに関して、濱田耕作氏は、像容の実態(大日ならば菩薩形だが、実際は如来形)が儀軌に合致しないので、伝承のまま薬師とする方が適当とされた⑩。ちなみに、元町石仏本尊の向きは、現在の堂宇設計においては、本尊を正面から拝した時、向かって右斜めにわずかにふれている。念のため方位磁石で確認すると、本尊は正しくほぼ真東に向いており、建物正面の方が真東の方位からやや南寄り(約15度以内)にずれている。つまり、本尊は西を背に阿弥陀の如く東面して安置されている。しかしながら、本尊は後述の尊像配置に留意しつつ勘案すると、西方阿弥陀と特定する訳にもいかない。

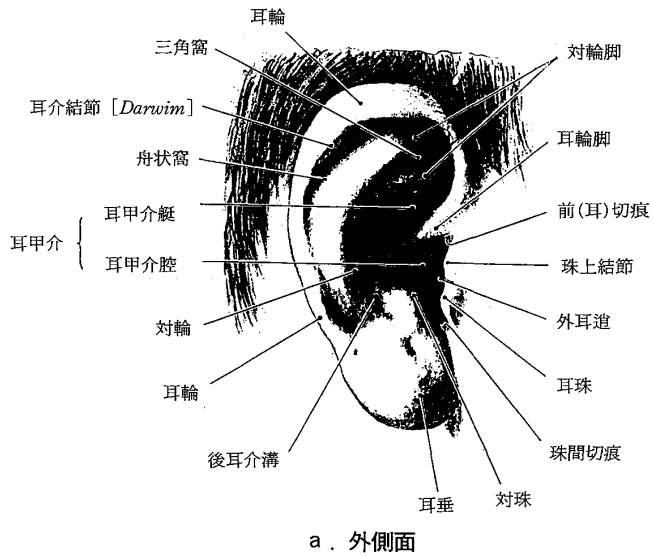
元町石仏・本尊の現在の像容は、破損が甚だしいが、どうにか創建当初の姿を窺うことは可能である(図2)。両脇はいずれも大破するものの、断片なども総合すると、左脇(北)に毘沙門天立像(280cm, 図3)、右脇(南)に不動(250cm)・二童子立像(150cm)を安置することが確認される(図4)。すなわち右脇群には、三尊中央に不動立像を配し、その左手には羂索を握ることが判明する(図5)。ちなみに、濱田氏によると不動の尊容は、全体を紅褐色に彩色し、儀軌に説く十九観に拠り、頭部は弁髪、口元には天地の二牙などが窺われたという。念のため『日本精華第九集』掲載図によって再確認すると、上記の形態的特徴の他に、左眼が眇でしかもその結膜半月ヒダ部が隠れることが追加確認される(図6)。さらに右脇童子像は、左手を^か右腋前で肩布を摘むかのように見え、右手は、右腿の向きに沿うように垂下して金剛棒を握るものと推測される(図7)。一方の左脇童子像は、合掌のポーズを示すが、腰部から下は、体軀が斜前に迫り出し傾くように処理されている(図8)。なお以上の姿態は、まさしく後掲の⑩大阪富田林市瀧谷寺不動(莎髻, 眇, 二牙)・二童子立像(寛治81094年)のポーズと瓜二つといえる程にきわめて酷似し、その密接な様式関連が窺える(図9)。すなわち、それに基づくならば、合掌像が矜羯羅童子(小野氏も同一)、一方、右腋下前で肩布の両端を併せつかみ、右手は垂下して逆手に金剛杵を執る姿

と近似する像が制多伽童子（小野氏も同一だが、ただし左手は屈して右手の二の腕を掴む?）と推測される。さらにあるいは、後掲の(12)豊後高田市・真木大堂不動・二童子立像（12世紀後半頃）ともある程度近似するが、最もみごとに酷似する例は瀧谷寺の作例である。ただし、画像作例で本尊は坐像ではあるが、後掲の(11)京都・青蓮院青不動坐像・二童子立像（11世紀）においても、特に脇侍二童子のポーズが近似することを指摘しておこう。

先述のように本尊左脇像は頭部・左手などが大破するが、残存部から右脚を上げ右手に宝棒（小野氏も同一）を握り甲冑姿で表される多聞天と推測される。その右腕袖先から伸びるたもとは長く尾のように孤を描き内側の善膩師童子像頭部に至る。なお、すでに触れたが、多聞天と本尊との間の壁面には善膩師童子像、及び多聞天と背中合わせの壁面には、珍しく吉祥天像の存在が推測される。ともあれ、吉祥天と薬師とは元来緊密に関わる尊像であるので、もし推測に過ちがなければ、この全体の尊像配置には一層注目すべきであり、また薬師という伝承もいっそう信憑性が高くなる。このように不動明王と多聞天の両像を中尊の脇侍として配置する特異な形式は、大分県内には極めて多く見られる特徴であり、つとに大分県外においても、主に天台系寺院に多く祀られることが指摘されている^⑩。

さて、本尊は、蓮華座に結跏趺坐しほぼ真東に向き、両脇侍は体軀を共にやや斜めに構え、内向きに対置されるが、全体としては基本的に東に面する。また本尊背後には、頭上を覆うかのようにカーブする薄肉彫りの舟形光背（頭光・身光。中に朱彩，黄土痕）を負う。衲衣は通肩である点に注目すべきであるが、左肩から腹部にかけて斜めに流れる衣褶を柔らかく示す(図10)。いまは欠失するが胸前にて右手を挙げ、左手（現状は粘土で造形）は膝上に置いていたものと推測される。現存する形状から、両手とも手首から上は別材で造り、手首は柄で本尊体軀に差す形式を採用していたことが分かる(図10)。この種の技法は、白杵石仏・古園石仏群中の大日及び多聞天像にも確認され、相互に類似することが指摘される。伏し眼で円満な容貌は、定朝様を彷彿とさせる温容さを示すが、右顎から頬にかけて破損する。なお顔にはわずかに金の彩色が窺われる。注視すれば顎はわずかに二重になり、頸には三道を表す。粒がやや小さめの螺髪が整然と並ぶ。墨描された眉と点墨された伏し眼を長めに作る。鼻は鼻孔を明瞭に示し、鼻翼は口元と共に品よく小さくまとめられ、凝視すれば口髭も墨描されていることが判明する(図11)。耳の輪郭は伸びやかに流麗な線を描き、耳朶は外向きに反る(図11・12)。ちなみに耳の形状は、例えば白杵古園石仏群大日、あるいはホキ第二群阿弥陀三尊などのそれがやや形式化に墮しているのに比べて、きわめて丁寧に造形されている点は注目すべきである。つまり、厳密に述べると、耳介は、外側の耳輪部を独特の張りのある曲線で太く示す。一方内部は、珍しく丁寧に対輪部上端に二脚に分かれた対輪脚の位置をも明示する(図12)。白杵石仏群においては、耳の外側輪郭を形作る耳輪，耳輪脚，耳垂（耳朶）などと、耳の内側輪郭を形作る対輪，対珠，耳珠，耳甲介などは認められるものの、対輪脚と三角窩は省略され決して表現されることはなかった(挿図1)。したがって、このような丁寧さが認められることは、元町石仏の特色でもあり、耳以外の他の部位の造形処理に関しても、ほぼ同様の傾向が窺える。

ところで、体軀の各部に打ち込んだ鉄釘の痕跡が見られるが、それは塑土で体軀の不足分を補い仕上げた部位である。このことに関して、石心塑像の技法という説(倉田文作氏)と泥化した基体を打釘によって強化しこれを木舞の役目として風化した表面を補修整形したしたものという説(鷲塚泰光氏)もある。膝前から台座にかけて摩滅・破損が激しいが、凝視すれば左脚を前に、右脚を奥に結跏趺坐することが判明する。この点も、後述の靈山寺薬師坐像に近似する。



挿図1 耳介各部位

元町石仏群を安置する堂宇の向かって右外隣(北)の丘陵東崖面にも、大破するがほぼ本尊と法量を同じくするものと推測される仏像(頭光・身光が付随)の痕跡が見られる(図13)。さらに、その左右にも両脇侍として配置される菩薩坐像(250cm)と推測される像の痕跡が確認される(図14)。ちなみに、堂宇に最も近いこの大きな三尊形式の坐像群(中尊坐像・両脇菩薩坐像。『豊後磨崖石仏の研究』図版第四・大分市上野元町石仏実測図に見えるB龕)とは別に、もう一つの中規模の三尊形式(中尊坐像・両脇立像。前掲書・実測図に見えるC龕)が隣接して彫出されているが、いずれも破損・摩滅し像容がはっきりしない。さらに、現在は磨崖仏の遺存する台地断崖の上下の平坦地は、造成された住宅地に隣接する。残念ながら宅地部分の断崖はコンクリートの防護壁により、斜面全体が覆い隠され、断崖上端部に三尊仏を安置する小龕(前掲書・実測図に見えるD)は辛うじて残るものの、蔦や苔に侵蝕されあまりにも無残な姿を晒している。

ところで、元町石仏と指呼の間に、いわゆる岩屋寺石仏群と呼ぶ石仏龕が存在する。仏龕を通観すれば、尊容はほとんど崩れて確認し難いが、辛うじて十一面観音立像(濱田氏は平安初期と推測。図15・20)と確認される貴重な彫刻が厳存する。ここで様式を比較するための基準作例を挙げるならば、同一尊名では、後掲の(7)観世音寺十一面観音立像(延久元1069年。図18)、愛媛太山寺十一面観音立像(2軀、平安)などがある。あるいは、同一尊名ではないが、基準作例となるべき彫像例を挙げるならば、後掲の(8)福井県大飯町・意足寺千手観音立像(応徳元1084年。図19)が知られる。すなわち、岩屋寺と意足寺の両者は、千手の多臂を除いて考えれば、多面を頭部に戴く点を共有する他、その衣文の形状が近似する。より具体的に述べると、つまり正面に懸かる二条のU字状の天衣、特にその上方のU字状上部の裳と腰布の折り返し部が作り出す形状が類似する。なお、裳と腰布の折り返し部が作り出す形状や膝を覆う裳の褶襞などに注目すれば、観世音寺十一面観音も岩屋寺像に近似する。もっとも意足寺千手観音の場合は、尊名からして自ずから体勢も異なり、また体軀の両側面から足元まで長く垂下する天衣は見られない。

〔4〕様式及び制作年代

元町石仏・本尊に最も様式の近似する例を挙げるならば、以下に掲げた参考作例中から(6)の奈良靈山寺薬師坐像及び日光・月光菩薩立像(治暦二1066年)を採択したい。元町と靈山寺の両本尊共蓮華座に結跏趺坐し、二重円光を内包する舟形光背を負う形式が近似する(図16)。とりわけ、眉・(伏し)眼・鼻・口元・頬・二重の顎・耳部などの相貌表現の他、鬢髪部及び肉髻部の螺髪形状が近似する(図17と図11を比較)。ただし、元町像が通肩、靈山寺像が偏袒右肩である点は相違する。ちなみに伏し眼の表現に限定するならば、後記の(1)広隆寺千手観音坐像(寛弘九1012年)、(4)広隆寺日光・月光菩薩立像(長勢。康平七1064年)、(7)観世音寺十一面観音立像(延久元1069年。図18)、(2)浄瑠璃寺九体阿弥陀坐像中脇仏三・六号像(1047年または1107年)などにも近似する。このような観点から大雑把に考えれば、いわゆる元町石仏の成立は、十一世紀半ば頃から十二世紀前半までの間を想定することができよう。

仏像彫刻史において、藤原様式は、定朝・長勢あたりで定朝様が完成すると見られるので、このいわゆる元町石仏も定朝様の系譜に連なる優雅な一作例と考えることができる。

《参考諸作例一覧》

- (1)京都・広隆寺千手観音坐像……………寛弘九(1012)年
- (2)京都・浄瑠璃寺九体阿弥陀坐像……………永承二(1047)年または嘉承二(1107)年
- (3)京都・西明寺薬師坐像……………永承二(1047)年
- (4)京都・広隆寺日光・月光菩薩立像(長勢) ……康平七(1064)年
- (5)京都・三十三間堂千手観音立像……………康平七(1064)年
- (6)奈良・靈山寺薬師坐像(像高86.9cm)・日光・月光菩薩立像…治暦二(1066)年
- (7)福岡・観世音寺十一面観音立像……………延久元(1069)年
- (8)福井・大飯町・意足寺千手観音立像……………応徳元(1084)年
- (9)奈良・福源寺薬師坐像……………応徳二(1085)年(像高126.5cm)
- (10)大阪・瀧谷寺不動(莎髻, 眇, 二牙)・二童子立像……本尊共・寛治八(1094)年
- (11)京都・青蓮院青不動坐像・二童子立像画像……………11世紀
- (12)大分・豊後高田市・真木大堂不動・二童子立像……12世紀後半頃
- (13)奈良・西大寺四王堂十一面観音立像……………大治四(1129)年 ~ 保元元(1156)年

ともあれ、脇侍不動・二童子にきわめて酷似する作例は、すでに触れたように、(10)大阪富田林市・瀧谷寺不動(莎髻, 眇, 二牙)・二童子立像(寛治八1094年)である。したがって、改めて(6)奈良靈山寺薬師坐像及び日光・月光菩薩立像(治暦二1066年)をも含めて総合的に勘案するならば、

いわゆる元町石仏群は、おそらく十一世紀末には成立していてもおかしくないと考えられる。

ところで、中野幡能氏は、いわゆる元町石仏を岩薬師と称することは「岩屋寺」の薬師如来の意味であろうとされ、もとは(元町と岩屋寺の石仏)全体を含めて「岩屋寺」と命名したものと推測された。既に地理的・歴史的概観のところでも触れたが、同氏はさらに、この一帯が平安時代に宇佐宮領「勝津留島」であったことに関連して、『宇佐大鏡』所載の天喜二(1054)年・康平二(1059)年の條に見える「四至 東限市河 西限高坂横道 南限岩屋寺前 北限市河」に着目され、「勝津留島」は現在の上野丘台地と全く適合し、「岩屋寺」が現地点にぴったり合うことを指摘された。このことから、岩屋寺は平安後期の十一世紀中頃の造立であろうと推測された^⑩。

以上、主に元町石仏本尊及び不動・二童子像に焦点を当てて元町石仏の成立年代に関する問題を考察してきたが、前記の結論は、近似する様式と傍証資料に基づいて導き出した結果であり、その限りにおいては大過はないものと考えられる。しかしながら、かつて倉田氏は以下のように異説を呈示されたのでここに紹介しておこう。すなわち「像容の大方は平安末の通形の如来形に似るが、頭部における地髪の張りが目立つあたりを見れば、制作は十三世紀に入っているものとも考えられる。いずれにせよいわゆる藤末鎌初の大作の一として注意されよう。」と^⑪。一方、鷲塚氏は、倉田氏よりやや早いものの、十二世後半期の造像を説かれた^⑫。なお、『大分の古代美術』の統一見解としては、両者の折衷案を採用され平安末～鎌倉初頭とされた^⑬。

ところで最後に参考までに、制作年代に関する諸説を挙げよう。例えば濱田氏は、平安初期とされ^⑭、また、小野玄妙氏は、奈良末弘仁以前とされた^⑮。しかし、前述の通り管見による結果に基づく限り、これら先学の諸説にはどうしても左袒し難い。とはいえ、倉田・鷲塚両氏の見解とも全く同一ではなく、今試みにその説と卑見との間を大幅に見た場合は、約一世紀程の年代差が生じてしまう。逆に幅を最小に縮めて考えれば、約半世紀の年代差となり、卑見の方がいくぶん早い草創年代を想定していることになる。さりとて、たとい管見とはいえ、結論は尊重すべきものとする。繰り返し触れるならば、いわゆる現存する元町石仏群は、早くても十一世紀中頃には造立され、あるいは遅くとも十一世紀末には成立しているはずであると結論づけたい。以上のように通説とはいくぶん相違する結論を得たが、拙稿において、もし、過ちや誤解があれば、博雅の御叱正を賜りたい。

注

- ① 「勝津留畠 畠七十町 宮召物麥地子 在家門布苧桑代系，田三町 已公田，但加地子町別一石宮召之，四至 東限市河 南限岩屋寺 西限高坂横道 北限市河 領主所帶證文在之，件津留者本荒野也，而永承元年之比，権介膳伴元恒申請宰之日，令荏隈・笠和・淵(判)太三箇所堺之日，国宰被尋問三箇郷司等之処，誠為荒野空閑地之由，進上請文畢，爰天喜元年八月二六日，多米倉滿廳座所裁申文云，請被殊任傍例與判，申立府国御判，為永代之私領，且旁殖苧桑，且開作空閑常荒地壹所狀，在大介(分)郡管荏隈郷勝津留河尻野，四至東限北廻，二方市河，南岩屋崎際，限西高国府岸上額畠際者，加署狀ハ，依傍與判，(中略)，康平二年三月十三日，廳宣云，可任本公驗并調度文書開發領掌，多米倉滿愁申字勝津留畠等事，四至東限市河，南限岩屋寺前，西限高坂横道，北限河等田中寺，副下調度文書等，(中略)，又承曆五年二月日国廳宣云，件地宇佐宮每年万燈会勤修御燈油新，任本公驗并先判旨，無他妨，津守常見可領掌者，大介高橋朝臣任，永保三年十月一日府下文云，都督藤原郷宣，任文書理可領掌者，於御油料床，可領掌之由，常見依申請也，應徳元年七月二九日，同下文云，同前事，永保三年九月二九日津守常見府裁申文云，同事，應徳二年九月十三日府下文云，子細同前 承徳三年八月日，宇佐宮御油御菌勝津留弁濟使，宮地常松国裁申云，当所之内開田不幾，欲被停止檢田使入勘者，外題判云，依請停止檢田入向，早可宮領之者，康和二年三月二八日国廳宣云，可令早任調度文書理，領掌勝津留畠事 大介紀朝臣，任」
『八幡宇佐宮御神領大鏡』(到津文書 大分県史料 二四。渡辺澄夫編著『豊後国荘園公領史料集成 五(上)豊後国荏隈郷・勝津留・笠和郷・賀来荘・阿南荘 史料』別府大学附属図書館 平成元年・所収)
- ② 飯沼賢司「豊後の石仏の造立の歴史的背景」(賀川光夫・菊田徹・飯沼賢司・仲嶺真信『白杵磨崖仏』吉川弘文館 1994年 9月刊行予定・所収)
- ③ 小野玄妙『大乘仏教芸術史の研究』大雄閣 昭和二年 p.387.
- ④ 「円寿寺，在笠和郷律院村，紀聞曰，徳治中，大友近江守貞宗遷岩屋寺於山上，更修飾仏殿，諸堂之美，結構輪奐為望刹，更名円寿寺，延道勇律師為開祖」
「岩屋寺，在笠和郷六坊村，紀聞曰，日羅者，嘗經過于此，翠崖崔巍曰靈場也，遂就其窟，自刻薬師二光仏及十二神将像，以結宇名岩屋寺，此地海近水鹹，乃祈禱鑿石，靈泉湧出，呼曰闕伽井」
唐橋世濟『豊後国志』卷之四，享和三年(復刻版 文献出版 昭和50年・所収)
- ⑤ 濱田耕作『豊後磨崖石仏の研究』京都帝国大学文学部考古学研究报告第九冊(大正十三年四月—同十四年三月／復刊・臨川書店 昭和51年) 文末挿図(p.148.相当部)無番号。
- ⑥ 中野幡能「豊後の磨崖仏をめぐる諸問題」(『日本歴史 第266号』吉川弘文館 1970年 所収)
- ⑦ 『大分県史・古代編』大分県 昭和59年 p.128. p.552.
- ⑧ 『大分市史 上巻』大分市役所 昭和30年 p.278-279.
- ⑨ 工藤利三郎『日本精華第九集 豊州摩崖石佛』精華苑刊 大正十年 図1・説明文参照
- ⑩ 濱田・前掲書 p.13.濱田氏は、『覚禅抄』を取り上げ，薬師法の條に「諸仏同體事」とあり，云く「一胎蔵大日薬師習故，秘説用法界定印(千手寶鉢手，定印同心也)究竟伝也，東寺金堂薬師安金剛界大日，是即安置両部大日心歟」，「又小野本仏薬師是胎蔵大日也，両僧正御建立，頗有深義云々」とあり，更に釈迦薬師も同體異名であつて「両者形像印契全同也」「古人所造，皆持薬壺」といつていることに言及している。『豊後磨崖仏石仏の研究』p.106.
- ⑪ 鈴木喜博「毘沙門信仰の一形態について」(『仏教芸術 149号』毎日新聞社 昭和58年)所収。例えば，十一面観音の両脇に，不動明王と毘沙門天を配置する三尊形式として次の寺院が挙げられる。滋賀伊勢廻寺，香川志度寺，長野牛伏寺など。
- ⑫ 前掲・中野論文参照
- ⑬ 『大分の古代美術』大分放送 昭和58年 P.256.

⑭ 前掲『大分の古代美術』 P.178.

⑮ 濱田・前掲書 p.25.

⑯ 小野・前掲書 p.526.

《図版出典》

図1・2・3・4・7・8・~~9~~・10・11・12・13・14・20 筆者撮影

図5・6・15 『日本精華第九集 豊州摩崖石佛』

図9・16・17・18・19 『日本彫刻史基礎資料集成 造像銘記篇 二 図版』中央公論美術出版社

挿図1 金子丑之助『日本人体解剖学 第二卷 内臓学・感覚器学』南山堂 昭和34年 掲載図310 a



图1 元町石仏本尊・不動・二童子・毘沙門天像

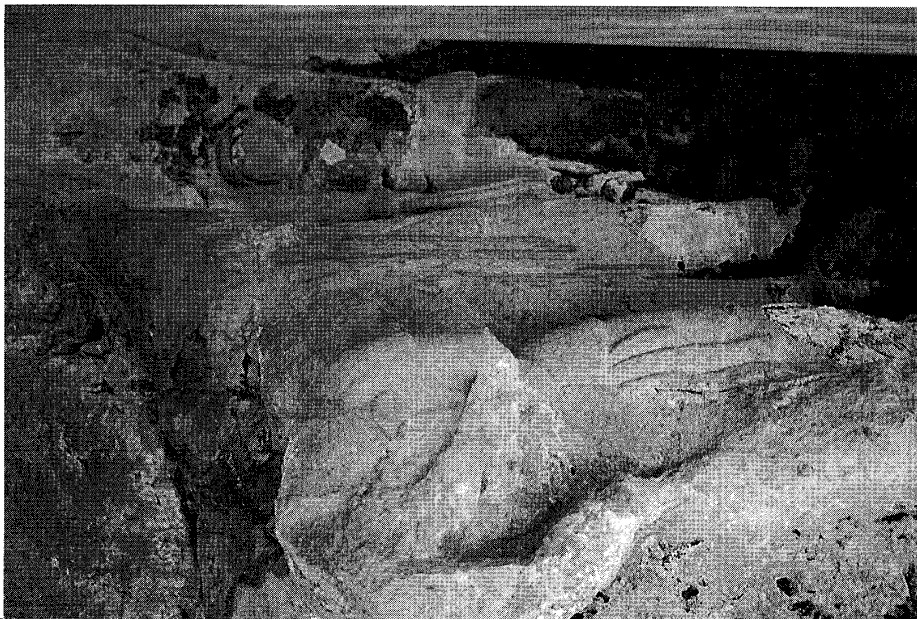


图4 不動・二童子立像

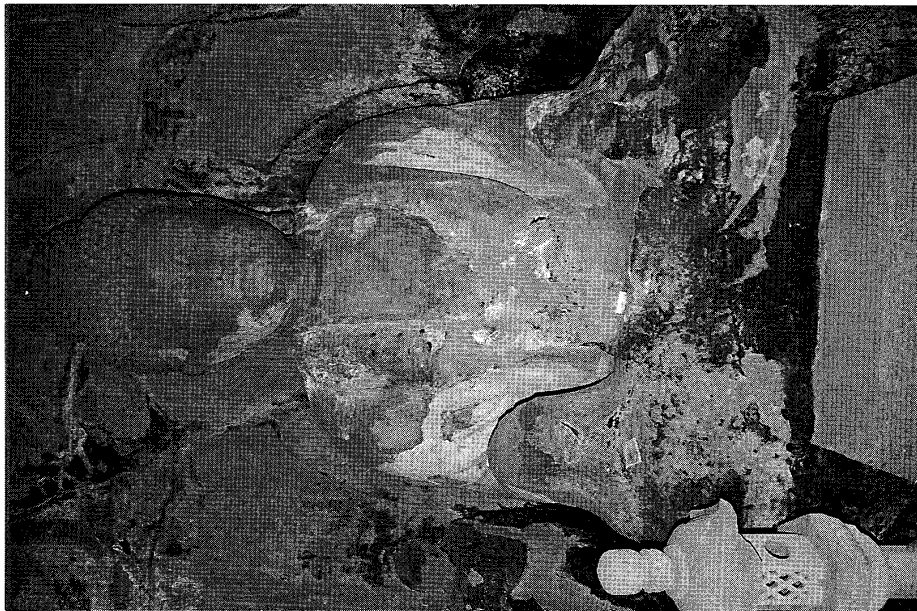


图2 元町石仏本尊

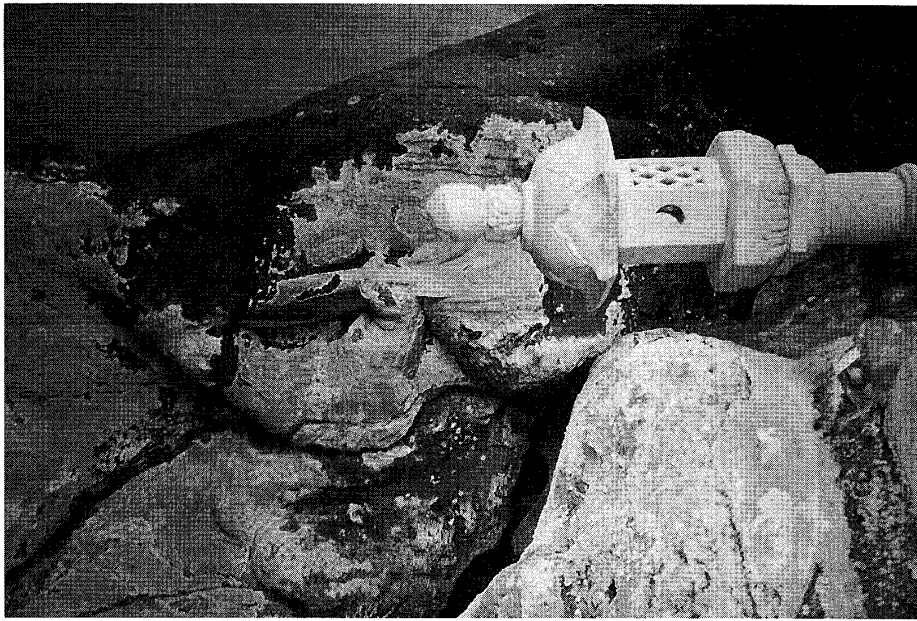


图3 毘沙門天立像



図5 不動立像



图6 不動顔面



图7 制多伽童子



图8 矜羯羅童子



図9 瀧谷寺不動・二童子立像



图10 元町石仏群本尊



图11 元町石仏群本尊頭部正面



图12 元町石仏群本尊頭部右側面



图13 元町石仏・堂外磨崖仏群



图14 元町石仏・堂外磨崖仏菩薩頭部



图15 岩屋寺石仏群十一面観音



图16 奈良靈山寺薬師三尊中尊



图17 靈山寺藥師頭部



图18 觀世音寺十一面觀音

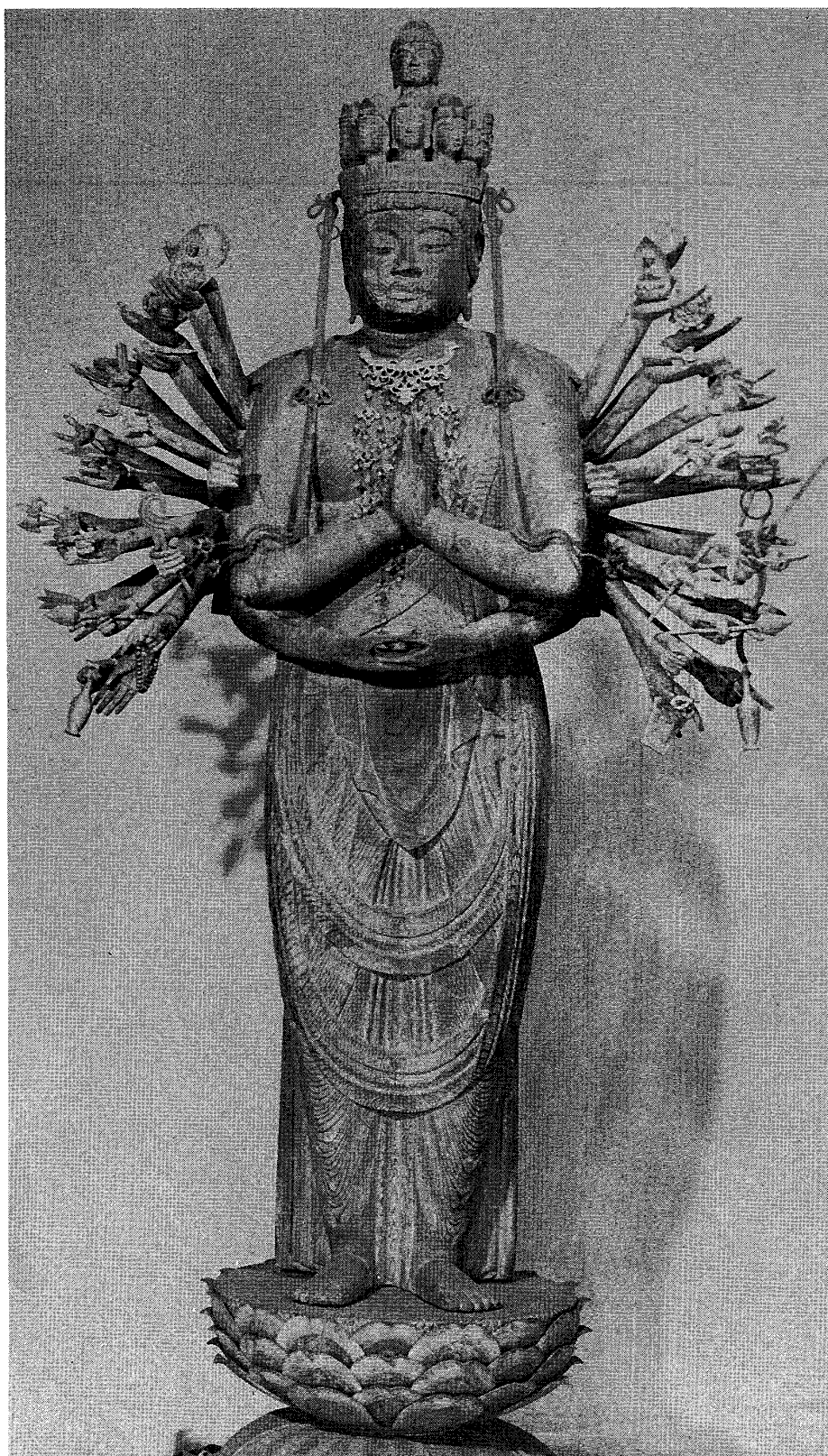


图19 福井意足寺千手观音



图20 岩屋寺石仏群十一面観音 (1979年撮影)